

日蓮主義研究者の絶好資料

日蓮 天晴會講演録 第貳輯

本書の内容

- 日蓮上人の尊容に就て……………竹内久一君
- 日蓮上人の勤王に就て……………脇田堯惇君
- 天晴地明……………本多日生君
- 富士五山に於ける眞蹟對照の實歴……………稻田海素君
- 非律賓の宗教事情及米國の教育主義……………井上長次君
- 靈格日蓮の愛國心……………陸軍歩兵中佐 小笠原長生君
- 日蓮上人の筆蹟に就て……………海軍大佐子爵 野口日主君
- 日蓮主義と細民救済……………法學士子爵 五島盛光君
- 將來の宗教としての日蓮主義……………編輯長 山川智應君
- 高山樗牛と日蓮上人……………東京帝大教授文學博士 姉崎正治君
- 佐渡前佐渡後……………「妙宗」日蓮主義主筆 小田智學君
- 宗教的訓練……………東京帝大講師文學士 小林一郎君
- 日蓮主義と實生活……………大僧正 本多日生君
- 迫害に對する日蓮上人の態度……………東京帝大講師文學士 小林一郎君
- 日蓮上人の信仰……………東京帝大講師文學士 本多日生君
- 佛界緣起論……………宗務總監僧正 野口日主君
- 世界統一は誇大妄想なる乎……………宗務總監僧正 野口日主君
- 織田信長と日蓮宗……………東洋大學講師 高島平三郎君
- 日蓮主義と日本……………大日本史料編纂員文學博士 辻善之助君
- 日蓮主義と源光國公……………顯本宗大學林教授 關田養叔君
- 日蓮上人と源光國公……………「村雲婦人」主筆權僧正 松森靈運君
- 寛嚴……………海軍大佐子爵 小笠原長生君
- 西人の法華經觀マスタ……………日宗大學長僧正 柴田一能君
- 日蓮主義と大鹽平八郎……………日宗大學長僧正 脇田堯惇君
- 軍隊教育と日蓮主義……………近衛第一旅團長陸軍少將 脇田堯惇君
- 身延記を拜して……………大僧正 本多日生君

發行所 取次販賣所

東京市淺草區南松山町二九法成寺中  
東京市淺草區北清島町一四(振替口座東京)

天晴會事務所

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可(毎月四日)  
明治三十四年六月十五日發行第一册百九十六號

(東京 三協印刷株式會社印刷)

# 統一

第百九十七號

日蓮上人の高恩  
大僧正 本多日生師  
慈悲に就て  
高島平三郎君  
藝道の起原に就て  
僧正 野口日主師



日蓮上人云く

我則是父の柔軟の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず、是誠に袂をくだし胸をこがす嘆な  
らざらんや

又云く

佛は人天の主一切衆生の父母也而かも開道の師也

### 日蓮上人の高恩

本多日生師

今日は日蓮上人の御恩の如何程迄に廣大であるか、又何を以て此の高恩に報いんと云ふ事に就て、お話し致そうと思ふのであります。

上人の御恩の深き事は大海の底も尙及ばず、其徳の高い事は須彌山も尙比すべきにあらざると、古來からいひ傳へますが、大海は廣く深く其底は何百尺あるか分らない様な處もある、又須彌山といふ山は宇宙の中で最も高い山で吾人の今日住居する地球杯は其周圍にあつて、恰も蟻塚の如くになつてあるのであります、上人の高恩は斯かる海に比するも尙及ばず、斯かる須彌山に比するも遠く及ばぬといふ處から思山徳海と申奉るのであります、如何なる譯で夫程迄に上人の御恩が高大であり深遠であるかと云ふ事に就て、仔細に考へて戴きたいのであります。

上人は日本に於る一大恩人である、衆生の大船師で

ある大良導師である、我國建國以來忠君愛國の人は數へ切れない程澤山現はれて居るのであります、けれども中にも色取を異にせる忠君愛國の大偉人は上人である、上人は只一通りの偉人でない、國民に對し神聖の意義ある忠君愛國の精神を教へられたお方である、又單に國民に向つて神聖なる國家觀念を興へられしのみならず、此一國が千代八千代に榮えんには平凡なる人力以外更に天佑といはうか、或は國家の御威稜といはうか或一種の強い力が加はらなかつたならば、逆も千代八千代に榮ゆる事は出来ない、無論我日本國は天皇の御稜威もあり天佑もありませうが、併し一度我國の歴史を繕く時は此御稜威も暗澹たる雲に閉されて天の日も其明を缺き給ふた時代もあつたのである、故に上人は安國論の中に

三寶世に在し、百王未だ窮せらざるに、此の世早く衰へ、其法何ぞ廢れたるや

と無限の嘆聲を漏されて居る、そこで私は稜威天佑といふ様な事も、深遠なる宗教の意義に基ける、或一の

宇宙神靈の力に外ならぬと思ふ、上人が立正安國といふは、下に於ては立派なる忠君愛國の民を鍛練する一大徳教を立て。上に對し上つては我國は神明佛國で、他邦と全然異なる所以を明かにせられたのである、故に安國論の中には

世皆正に背き、人悉く惡に歸す、故に善神國を捨、去り、聖人所を辭して還らず、是を以て魔來り鬼來り災起り難起る、言はずんばあるべからず、恐れずんばあるべからず。

これは上人畢生の主張で、所謂神天上の法門である、如何に國あり民あらんも、心と云ふものが惡かつたならば、善神は天に上り邪神惡鬼地に蔓り專横を極むる事は、丁度空屋に盜賊の忍び込む様なものであると仰せられて居る、今日は西洋の思想等も入て科學萬能の熱に浮かされ、宇宙の大なる力に感ずる人が極めて少く、立正安國と云ふも其眞意に徹底する人が甚だ稀でありませう、眞に考へれば上人に依て此立正安國は呼起されるべきでありませう、上人の教は下に對して衆生を

で給ひ、我國の大切なる道徳の根本要義を明らかにせられたのである。

それは一人一人が君國の爲に盡すも、義は泰山よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと心得て犠牲以て國君の爲に盡すが、其處に只一點殘るのは清き永存の精神で、身は此國に盡して了ふが、生ける魂本體なるものは如何になるものかといふに、國に盡した形骸は假令骨となり土と化せようとも、國を思ひ世を愛する心は決して亡びない、七度人間と生れかはり國賊を平らげ君國の爲に盡さずんば措かずといふ、此盡忠不亡の二精神は立派なる人の心には必らず起る、此二つが調和してこそ始めて國家の爲に笑つて死する事が出来るので、大和民族の忠君愛國といふも、此の堅固なる信念の力より湧き出で、こそ、眞の忠義も盡されるのであらうと思ふ、どうも未來を云ふと現實を忘れる傾があります、眞の忠君愛國には人の亡びないと云ふ心と忠君の念と此兩者は、別に甲乙のあるべき苦のものではない、然るに之を調和せしむる事が出来ず、不滅を理

救済するのみならず、上神明佛陀の威力を養はれたもので、これを倍増威光と申しますが、下に於て正しい教がない時は、自然に人心が亂る、如く、上に向つて法樂し神明佛陀の威力を増さなかつたならば、神亦衰へ邪神惡鬼其處を得るに至るのであります、故に仁王經とか藥師經等は皆正しき教を以て、神に力を加ふる事になつて居ります。

更に地上の事に就て申すれば、上人は封建制度に反對し、萬世一系の天皇の御代になし奉らなかつたならば、日本の國體に禍はぬ事を極力主張して居られるのであります、今日は王政復古し太平無事誠に目出度御代でありませうが、上人の御在世當時に當つては、源頼朝が鎌倉に幕府を開き天下の政權を掌握してより皇室の御秩威は頓と衰頽して振はず、偶建武中興の業成り光漸く輝んとせしも足利が起り引續いて徳川幕府が政權を執て三百有餘年、即ち明治維新に至る迄といふものは、實に暗澹たる雲霧に閉されてあつたのであります、上人は實に六百年以前鎌倉幕府時代に出

想とするものが國家を忘れるといふ様な事があつたならば、是程悲惨な事はあるまいと思ふ、然るに上人に至りましては之が極めて能く調和せられて、一方には宗教の不滅の信念を與へ一方には正法を以て國家に盡すべき事を教へ、兩者は相調和して愛國の精神は活躍して居るのである、されば軍人も此宗教の信念あつて始めて苦戰奮闘の中に於ても心から愉快に、堯爾として其巷に斃れる事が出来るのである、彼の武人として有名なる清正公の如きは法の法華經信者であつたことは人の能く知る處であるが、新田義貞の如きも、如來秘密神道之方の文を以て守りとし、楠公の如きも能く調べて見ると、法華經の信者であつたと云ふ事より考へますれば、彼の如き忠君の念も法華經の信念と結合してこそ、始めて萬代に亘つて嗚呼忠臣と呼ばれるが如き働きが湧き出でたものであるといふ事が推し測られる、故に國と教とは兩者相俟て發揮するものである、體が曲れば影之に従ふが如く教といふものが亂れたならば國は安らかなには治らない、只國と云ふが國を盛

り立るのは人心である、人心を正するのは教である、故に教といふ本體が亂れたならば必らずや人心は腐敗し國家は衰頹するといふことは明かなる事實である、上人は別に大動位と云ふ様な世間よりの功勞も認められなかつたけれども、爾後の日本としては上人の大なる事は、愈倍認められるであらうと信じます。

更に人々の上に就て申すすれば、上人は開目抄の中に、日蓮が此教を興へなかつたならば、萬人は皆盲目である、他の佛教で心眼を開いたといふもの、焉ぞ知らん、其等は悉く片目或は眇の寄合で正しく兩眼を開いてやつたのは我であると仰せになつてある、尙報恩抄の中にも「一切衆生の盲目を開ける功德あり」とあつて、此功德は天台や傳教にも勝れ、龍樹嘉祥にも遙かに越えて居ると仰せられた、是天台や傳教も一心三觀とか、法華三昧とか色々に言ふて法華を弘められましたけれども、併し未だ一切衆生の盲目を完全に開いて居ない、故に盲目といふ上からいへば他のものと撰ぶ處がないから、此功德は天台傳教にも勝れ、龍樹

青黃赤白等の色あるに非ず、長短方圓の形あるに非ず香のあるわけのものでもない、即ち天子様が難有と思ひ乞食が來れば憐愍の心を生ずる、之は何物よりも先第一に吾人に存在して永久に亡びざる尊い處のものである日本人が千代八千代と云ふのは二萬年とか一億年とか限られたで無いのと同じく、吾人の靈徳は永久の生命を有するもので、此生命は尊き總てのものを具へて居るのである、今二の例を擧て申すれば、吾人と雖も一度佛智を發得すれば、天地法界は一瞥の下に見渡し、彼は善此は惡、斯の如き事をなしたる結果はどうと悉く見得らるゝ大智も吾人の心に具へて居る、又哀なるものと見ては悉く救濟する力も具へて居る、又美的の方面から云へば、梅櫻等の花の美も人としての美も悉く具有して居る、今はお互に此姿も思ふ様にならず目が悪かつたり耳が悪かつたり、顔形も餘りよくなく品格も劣等であるが之れと云ふのも皆心の現はれでありますから、心次第で姿は少々悪くても其光といふものは眉間に來つて、靈光を生ずるものでありませぬ、佛

嘉祥にも超えて居ると仰せになつたのである、更に言葉を変へて簡短に申すれば、此眼に就て、明三明徳とか或は性と天道といふ様な事もありますが、人は皆己固有の玉と云ふものをもつて居るけれども、磨かずば玉も鏡も何かせんで、若人にして此本質たる玉を磨かなかつたならば、一見何程立派に見えやうとも、丁度炭團に金紙を張付た様なもので、時を経るに従つて下から黒い處が顯はれて、其價値は下がる、故に人と致しましては此本質を磨くといふ事は極めて大切な事で之を世間の言葉で申すすれば明三明徳でありませぬが、宗教で云へば所謂佛性を磨かねばならぬ、然らば佛性とは如何なるものであるかと申すすると、萬代不易の生命であつて、是は神に依て造られたものでも無れば、勿論親から貰つたものでもない、無始無終のものである、斯かる尊き無限の生命あるものを具へて居るにも係はらず其を自覺しないから、稍ともすると悪い事をする、又一朝事に接するとヒクツクのである、然らば此靈なるものは如何なる形を有するかと云ふに

は眉間に白毫相といつて尊い光を放つたと申しますが、夫れ迄には行かずとも、心に依ては必らず眉間の相が多少變ずることは疑無いのであります、先日シャイトルで土地を開きましたババの寫眞を見ましたが、随分色は黒いが其間に何と無く一種侵すべからざる威嚴を具へて居る、是は單に此ババのみでなく、如何なる人も此尊いものを具有して居る、此意味合を上人は教へられたのである、人が向上するにも道德といふ地盤を定むる事が何より大切で、丁度家を建てるにも先以て其基礎が大事であるが如く、人間として社會上に生存し、美華を結ぶには、先第一に人の心即永久不滅の精神を磨かねばならぬ、之が佛教或は今日西洋の倫理東洋の道德等、其説く所多少淺深不同はあらうとも、均しく人心を正すと云ふ事を以て立脚地として居る所以である、故に是は一番に力を入れべき事でありませぬが上人が出でらるゝ前に於ては何れも之れが完全に教へられて居ない、然るに上人が一度出るや恰も雲去ての月の如く、絶對の力の尊ぶべきものなる事が愈々明瞭

になつたのであります。故に上人の教を信すれば恰も朝起きて目を開けば貴賤の別賢愚の隔てなく、均しく太陽の光により萬象燦然として目に映するが如く、我心固有の偉大なる力を認知するに至るのであります。之を教へられたのが即ち上人である、若人にして生盲で日の光をも見ることが出来なかつたならば、花も董も何かせんで、凡そ不幸といふ不幸の中に盲目不幸はない、既に肉眼に於て然り、況や心眼に於てをや。吾人は上人に依て心眼を開かれなかつたならば、上に神佛ある事を知らざると同時に、又下吾人に不滅の靈のある事を辨ふる事は出来ない、人生第一の不幸に過ぎたるものはあるまいと思ひます。けれども是が感じが悪いからどうも上人の此高恩に心から徹底する人が甚ない、今少し是れを分りよく申しますれば、爰に立派なる人がある、此人は家に於ては何百人と云ふ程の下僕を召使つて居る、處が諸君の御歸り道が険はしく聞くはなる嗟危険であらうと心配から、自己自ら提燈を以て吾人を案内してくれる、夫れを考へたならばお

互如何に難有感するか、上人は實に此身分ある人が提燈を以て見送るが如く吾人の爲に提燈を以て導かれたお方である、故に冥土の光ども生死の長夜を照す大燈明とも申上るので、お會式に火を澤山ともすのも東京で萬燈を澤山に出すのも、此尊高なる人が闇路を照し導いて下さつた、それを形とするので、闇店披露杯で景氣付に提燈をとすのと、大に意味が違ふのであります、上人の本地を明せば釋尊の所化中澤山の菩薩はありましたが、其菩薩中一番尊いのが本化上行菩薩で、其本化上行が佛の前に現はれると多くの菩薩は、猿猴の如く或は樵夫の如く、凡て光を失ふたと云ふ事が法華經の涌出品にあります、上人は其釋尊第一の弟子上行菩薩の再誕なる事を諸處に何回となく繰返されて居る、故に上人は日本の人として然も房州は小港に一人海人の子として生れられたけれども、上人自らは尊き菩薩であらせられた、六萬恒河沙の菩薩も只一合の下に左右する程の活力あるお方であつた、それが日本に出て提燈を以て半道や一里でなく、六十有餘年の間雨

に隠され風に吹かれ様々の迫害をも忍ばれて、此の光をば消さぬ様にと苦心慘憺せられた、彼の四箇大難の如きも亦衆生引導の爲に提げられたる、提燈に對する大暴風であつたが、之れが爲にも消さずして吾人の道案内をせられたのが實に上人である、下女か下男であると思つたのは何ぞ知らん、本化上行菩薩であつたのである、此事は上人自ら「推量難からず既に眼前なり」と仰せになつたが、法華經と上人の事蹟とを比較し考へて見れば、疑はんとしても疑ふ餘地はないのである、縦合其身は破れ衣を纏はせ給ふとも本來は尊きお方でそれが提燈を以て道案内をせられたのである、更に又上人が一代苦勞遊ばされたのも、上は法の爲佛の爲といふも佛が上人を苦しむる筈はない、畢竟吾人の心の麻痺に起因するので、吾人が上人を苦められたのであります。

今解り易い爲に一例を擧て申すれば、法華傳の中に、或所に一人の富豪があつた、此人は殺生が唯一の道樂で、家の豊で困らないにも拘はらず、毎日殺生の

みを事として、鶴とか鶩とか云ふ様なものを日に何十羽といふ程擧ては歸り、又飽く事を知らなかつた、然るに此人に二人の娘があつて、父の無益の殺生に耽るを非常に氣づかひ、毎日父に向つて云ふのには、家が貧しくて困るといふのでもありませんから、無益の殺生は止めて下さい、殊に鶴は千年龜は萬年とも申て、目出度鳥でありますから、之を殺すのは其罪甚重であると佛法にも教へてありますから、どうか殺生だけは思止つて頂きたいと諫めるけれども、父は少しも聽き入れない、そこで姉妹二人の娘は詮方なく、或日の事白衣を纏て鶴に化裝し、鶴の下る様な處に行き父の来るを待受たところが父は例の如く鐵砲を肩にかけてやつて来た處が圍らさず大鶴二羽居るのを見て之はとばかりに打喜んで撃ち止た、すると一羽は直ぐ斃れたが不思議にも他の一羽が舞立たぬ、之は幸と續て一羽をも撃止めて得たり賢しと近付いて見れば、こは如何に鶴と思ひしは我娘であつた、そこで娘は蟲の息で父上之で殺生は止めて下さい、私は身を犠牲としてのお願

だからといはれた、此に於てか流石の養生好きの父も忽然として悔悟し、始めて養生を止めたと云ふことがありますが、若しも娘が意見する中に聞けば、斯くの如く最愛の娘を殺さなくて済んだであらうませう、今又上人の御懇難も之と同一で、只口で云ふた丈で聞き入れる様な氣根であつたならば雪中四箇年の辛酸も嘗められなかつたのであるが、皆人が強情で只口で云ふ丈では少しも感じないから、畏くも上行の再譚たる御身が卑しき武士共に引立てられ、或は言ふ甲斐ない侮辱を受け、剃さへ首の坐にまで据えられたのでありませう、實に上人の傳を讀めば如何なる人であつても感動せぬ者はありません、口で四箇年といへば何でもありませんが、實際には中々容易でない、然かもそれが塚原三味堂の破屋に雨雪にも意とし給はずあらせられた、近來は偶通夜杯といへば毛布や衣服の準備をして用意周到であるが上人のは全くそう云ふことはなかつた、身に一分の咎も無く清き心より最第一の教を以て國家社會を教はんとし給ひしなるに、暴逆無道の鎌倉

愈感する、故に上人も現在に斯く迄にして導けば信する人もありやせんと思召し、法は尊いが經の儘に教へたのでは少しも響かぬ、故に有ゆる辛酸を嘗めて、法華經のまゝに活躍して見せれば、茲に上行菩薩の化身なる事も分り、彼に依て此を思へば確かに法華經を信する者は、尊き果報を受ける事疑なしといふ信仰が起るであらうと身を以て指導し給ふたのである。

尙上人の御恩の高大なる事に就てお話致したいが、時間に制限もありませうれば、何を以てか此高恩に報いんと云ふ事に就て一言致しませう、上人在て始めて忠君愛國と、不滅の信念とが合致する事を教へられたのである、然るに吾人の心の麻痺せるにより有ゆる辛酸を嘗めさせられ、然も上行菩薩が近寄易き人となつて闇路に迷へる我等の爲に、懇切なる指導をせられたのであるが、此高恩に對し國家が大開號或は大菩薩號を贈つて報い得るか否やと云ふに、左様な事をするも上人は何等の痛傷をも感ぜられない、勿論衣を以てするも、食を以てするも、家を以てするも、是は上人の甚

幕府は之を罪したのである、上人は實に身を以て法華經を讀み、身を以て衆生を教化せられたのである、是といふも口で教ふるも分らないから、斯くの如くすれば如何なる愚人も、上行菩薩が我日本に出でて信仰の道を開き、夫が爲に幾多の艱難辛苦を遊ばされたものであるといふ事に氣付であらうとの深き思召しであつたので上人を惱まし上つたのはお互が心酔して本心を失つて居たからであります、決して單に北條氏一人のみが悪いのではない、法蓮抄の中に、佛は無始より大慈大悲の光を放ち心配せられ、我等衆生を導かんが爲に假に淨飯王宮に身を托し丈六の姿を現じて、大法を説き給ふたのであると云ふ事があります、假令吾人は餓鬼畜生に生れるも如來の慈光は絶えず發射し給ふて居たのである、故に現在に如何に悲惨なる生活をするも、立派な法華經の信仰を持てば佛になれる事は疑ひないのであるが、信仰杯はとうでもよい、眼前に食はねば死ぬ杯と思ふ凡俗共には、現在に首切らるゝといふ様なことは皆痛切に響く、殊にそれが法の爲の故と聞ては

大喜はざる所である、然らば如何にして是に報ゆべきか、今一例を舉てお話致しませう、彼の印度に著婆と云ふ名醫があつた、是は丁度釋尊と同時代の人で、釋尊は心の病を愈し、著婆は肉體の病を愈す人であつた彼の淨十三部經にある瀧婆沙羅王と韋提希夫人との間に有名なる阿闍世王といふがある、著婆は韋提希夫人の子ではないが、此阿闍世王とは腹達の兄弟で、非常に瀧婆沙羅王に愛せられた、著婆は又非常に此人世に病のある事を憂へられ、學問するも業を習ふも、一度病を得れば何の役にも立たぬ、又如何に富貴なりとも病床に呻吟する様であつたならば富又何かせんで、凡そ人世不幸といふ不幸の中病程不幸なるものはない、今心の病の方は釋尊が療治になるが、未だ肉體の病を愈す名醫が無い、依て私は身の病を愈す醫師になりたといと、そこで父瀧婆沙羅王は天下の名醫を呼んで以て著婆の師として學ばしめた、處が著婆は之等の醫師は以て悉く師となすに足らずと卻けられた、然るに唯一人其中に偉い人があつて著婆に向ひ、此一里四方にある

草の中で薬にならぬものがあるならば採り來れと命せられた、そこで著婆は日々辨當持で尋ねて見たが、遂一本も見當らない、依て止無く其旨を告ると、それで卒業であるといはれた、著婆はかゝる天才不思議な人であつたが、愈病人を治療する様になつて或日の事外に出ると一人の花賣に出あつた、然るに其籠の中に靈光を放つ一物あるを認めて、之を買つて見た處が是ぞ草花ならで、藥王樹といふ名木であつて今のX光線の如き作用あるもので、著婆は此名木を以て天下の病人を診察せられたが、或時非常な金持の婦人が頭痛がするといふて診を受に來た、著婆は藥王樹に由て見た處が頭の中に蟲が澤山湧いて居るのを發見し、之を出して直ちに治療した、又或時に屋根から墜て脊骨を折た人があつたが之をも立處に快復せしむるといふ風で幾多の人々を救ふた、そこで色々ものを持來つて御禮をするけれども著婆は受けない、勿論王の長子であるから衣食はもとより、車もいらねば自動車もいらぬ、我は汝等の病を救はんことを欲するのみで塵一本の御禮

人も止無く佛前に拜跪し合掌禮拜する、宗教の儀式なるものが起つて來る、此儀式なるものは一切を纏めて何を以てか是に報いんと真心より合掌するので、決して間に合せのものでない、斯くして上人に伺へば上人は曰く、我は錦繡綾羅、金殿玉樓、美酒佳肴、一も欲する處にあらす、汝等は法華經により一大信仰を以て、佛になる道を修行してくれ、即ち現在に於ては日本國民として、又日蓮が弟子檀那は模範的幸福なる生涯を送り、未來は閻魔法王の前に至るも耻ない立派なる佛となつてくれ、是が我に對する禮であるといはれる、故に吾人は此日常を立派に送るが上人に對しての報恩であるといふ事になる、然らば其方法はという、之には是非月一回や二回位は縱令雨が降らうが風が吹うが教を聞に來て修養を積む必要があると思ふ、上人が佐渡四箇年の苦も龍の口の御難も、悉く吾人を教へ導んが爲であらせられた事なれば、諸君は今私が説く説教も上人佐渡四箇年の説教と差別ありと見ず、上人が只今此東京淺草に出られて、汝等此教を聴けよと思召さ

もいらぬと、何を持って行くも請はられる、が併し治療してもらつた方では、如何にしても禮を取つてくれなから詮術なく、毎朝頭を下る事をやるものもあれば又一方では身體を清め三度づ、合掌禮拜するといふ様に、宗教の何を以てか之に報いんといふ状態が、極めてよく示されてあります、斯くしても不快の念は愈禁じ難く何とかして禮をせねばならぬといふ心は積り積つて、如何にしたならばよからうと迫ると、彼の云く諸氏は私に依て本疾は悉く愈たが未だ以て心の病が愈えない、故に釋迦牟尼佛の御下に行き心の病を愈せ、夫が私に報ゆる唯一の禮であるぞと云はれた、そこで彼等はそんな事ならばいと易いことであると、今迄全く無信仰であつた奴共も我先にと争つて佛の御下に至つた、斯くして著婆は皆佛の下に送り教化を受しめた上人に對しても亦然りで、種々の衣食を供へ、莊嚴を施して心を盡すも、上人御自身に取ては何でもない、著婆が總ての禮を辭され我は臆辨當で諸氏の病を愈すの一あるのみといはれたと同一である、爰に於てか吾

れて居ると心得ねばならぬ、何となれば身は不肖なりとも戒徳は具へずとも、左右前後は上人の血と涙で生かされて居るから、上人が私の前後に居て教へ給ふも同じである、聖僧の恩をば凡僧に報すべしと仰せられたのも亦此意味から出たるお言葉であります、されば上人の唱へ給ひし南無妙法蓮華經も、諸君の唱へ給ふ南無妙法蓮華經も、共に血と力が通ふて居る事を考へられ、上人の御恩の容易ならず、何を以て之に報いんとするも報ゆる能はず、依て全精神をこめざるべからざる事を納得し、上人の理想せし一大目的に向はねばならぬ、それには是非説教を聞く事が大切である、彼の名醫著婆が釋尊の下に行て教を聴け、それが我に報ゆる所以であるといはれたが如く、諸君は上人の教を聞いて身心を磨き、充分修養に努めて弟子檀那としての品性をつくり上げるのが、則ち其が上人の高恩に報ゆる唯一の方法である事を忘却してはなりません。(六元)

## 慈悲に就て (地明會第一例會講演)

高島平三郎君

私は諸姉に信仰教理の事を御話するだけの研究を経て居りませぬが、本多上人より婦人の爲に話をせよと云ふのでありましたから、御請合致した次第であります、唯だ何か参考になることを申し上げたいと考へます、諸姉は既に本多上人より有益なる講説を御聞になつたので、私は變つた方面より申し上げよう、私は宗門の事は能く存じませぬが、日蓮上人の人と爲り又其一代の事蹟等に就て深く吾々の模範として學ぶべきことがあると思ふ。

今慈悲と云ふ題を掲げて置きましたが、是はこのたび發行になりました橘香集の九十三頁に載せてあります、およそ何れの職業の人でありましても世に獨りで居ることは出来ませぬ、家庭を作れば當然子孫が殖える、子孫が多いからと云つて山の中へ捨てることは勿論出来ない、私共は如何に我慢強きとも門を開けて

暮しては行けぬ全く辛抱が出来ない、必ず他の人と交際して行かなければならぬ、相互は家庭に於て種々の事を爲しつゝ居りまするが、亦常に人と相接して居る、男子となれば交際が廣くなつて中々に面倒である、近頃は婦人の方も亦社交の人として働かれて居る、斯の如く人との關係が益々複雑となつて来る今の時に於ては、一つの道理があつて萬事種々なる道が表はれる、何うしてもなくてはならぬは道である、而して道は人の行爲に現はれる、道は人を相手とするものであつて即ち慈悲を一貫して行くべきである、凡そ生あるものは慈悲を有つて諸事を處理して行かなければならぬ、私の調べた範圍では然うである、上人は此點に就て御自身に御實驗になりました。

殊に婦人に在りては最も慈悲の心が貴いのである。人より敬はれ尊ばれるに至るは、皆慈悲の活動が種々の方面に表はれる、からである、慈悲の念慮なく空威張りをしたからとてそれは一文の價値がない、或人は上人の御人格に對して激烈なる性格であつて、殺伐なる給ふて居る、さればとて本像や繪像の佛様は難有ないと云ふてはいかぬ、慈悲心の根柢より現はれた行爲は如何なる場合にも美しい、それ故に諸姉が、夫に事入るときにも姑に事入る場合にも温情を以て接しなば、春風そよよと吹いて平和の波が湛へらるゝ様になる、姑が根性が悪いと云ふが佛の心を有つて居る、何人でも佛性の慈悲心があるものである。

同九十三頁には

涅槃經に云く、一切衆生の異の苦を受るは是れ如來一人の苦なりと、日蓮云く一切衆生の一切の苦を受るは悉く是れ日蓮一人が苦みと申すべし (七十八條抄)

とあります、この聖訓は眞に難有い、之を發し得ることは容易であるべきものでない、吾々は人の苦みを見て黙つて居ることは出来ぬ、例へば姑となりては嫁の苦みを見て自分の苦みなりと思はねばならぬ、元來婦人は身體が弱い、永い習慣によりて苦みがある、即ち娼妓の如きは非常の苦痛でありましよう、他人の苦みを自分の苦みとし、他の樂を自分の樂とせなければ

亂暴の人であるから嫌いだと云ふが、之は拆伏と云ふのであつて即ち攻撃の態度の見えますが、其の根柢には慈悲の源泉より湧いて出た可愛の涙が溢れて、助けてやりたいと云ふ大慈悲心より起つたものである、そうであるから上人より拆伏せられたるものは、何れも誠意より之に懐き服せざるものはない、世の中には親母と祖母とが甘いから子供が馬鹿にして困ると云ふて居る人がありますが、眞實の慈悲の心から育てなければ服するものでない、上人の主義は涙を抑へて強て之を矯むるのであつて、決して無茶苦茶に爲たのではない、萬古一貫の大主義より發現したのである、諸姉は子供を育てるには叱る場合には叱るが宜いが、可愛の涙を湛へて懇切に接しなければならぬ、橘香集の九十三頁を御覽になりませぬ、

如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是なり

とあります、如來とは佛様のことでありますが、佛様は此處に居らるゝか、寺の御堂か、佛壇かと云はゞ、佛様は確かに一切衆生の心の中の大慈悲心の中に宿り



ならぬ、人の苦みを思ふのを學問上では同情と云へま  
 するが、同情があれば必然佛性が現はれて来る、日蓮  
 上人は法華經の精神生命を心讀致しまして、六十一年  
 の一生涯を通し、行住座臥、奮闘活動に移したのであ  
 ります、私の知りて居る範圍で申すならば、温かき  
 慈悲がありますれば、鬼婆々と云ふ人でも他を動かし  
 たと云ふが如き實例がある、私の友達に典獄がある、  
 永く司獄官を勤めて居りますが其人は佛性がある、罪  
 人を憎いとはおもはぬ、現に在四人の中に女學校中學  
 校の教育を受けた青年男女が二百名位居ります、そう  
 ですが、入監者があると親を呼んで説諭をして居る、大  
 概の罪人は泣いて其罪を悔いて居ると云ふことであ  
 る、其経験は數年前、はりがぬ強盜と云ふのがあつて  
 極悪非道のものであつた、その犯罪人は縛に就いて何  
 處の監獄へ入りても、二三日の間には逃げると云ふて  
 居たが實に電のやうに所在を暗ました、處が藤澤典獄  
 の下に來たのは冬の寒さ身に沁む頃であつたが、典獄  
 が監内を廻回しました處が、如何にも寒さうに慄へて

今までのふ子を付けて置いて呉れと云ふて、懇ろに書  
 狀を認めて送りたと云ふ美談があります、斯く動物に  
 まで同情をもつて居ることがなければならぬ。

さて婦人は夫に對して佛性を如何様にして現はすべ  
 さかと云ふに、至誠懇切なる温かき同情を以て事ふる  
 ことである、而しながら同情は経験がなければ出來ぬ、  
 例へば飢たることや寒いことなどは、みな経験によら  
 なければ其消息は解らぬ、私は十年程學習院に教鞭を  
 取りて居りましたが、畏れ多いことであります、  
 皇太子殿下の椅子は他の學生と同しく蒲團がない、斯  
 様にして民情を觀察せられて居る、亦宮様の軍人は行  
 軍の際など天幕に露營せられて居るから兵隊の苦みを  
 知ることが出来る、そうであるから特に婦人の方は、  
 人の嫌がることでも自から経験することが大事であ  
 る。

近頃は小説などを爆發物の様に取扱つて居るが、斯  
 かる教育の方針は結構と云はれない、小説は男でも女  
 でも一讀しますれば、其奥底まで想像によりて経験せ

居るから、可愛相にさぞ寒からう暖かい處にやつてや  
 れと部下に命じました、而るに彼は過去の罪の悪性よ  
 り一轉化して夢は醒めしか、役人に向て云ふよう、最  
 う私は逃げない安心しました何と情深い人であらう  
 か、私は今日まで人から優しい言葉を聞いたことがな  
 い、此處の典獄は寒からうから暖い處にやつてやれと  
 云ふて呉れたので、最うこゝで一生を送ると云ふて恰  
 も虎が羊の如くになつた様に、法廷に於ても犯罪の事  
 實を明白に陳述して處刑の露と消へたそうですが、苟  
 もこの慈悲同情の心あれば誰人でも涙を流すのであ  
 る、之が最も大事である、夫婦の關係に置きましても  
 慈悲の根柢より築き上げたる愛でありませぬければ、  
 眞實に意義ある平和を得ることが出來ない、吾々は生  
 活を送る上に於て親子夫婦兄弟其他總てが圓滿でなけ  
 ればならぬ、それ故に慈悲が最も大事である、上人の  
 御人格を窺ひますると慈悲は動物にまで及んで居る、  
 上人は多年御乗りになつて居つた馬を人手に渡すと  
 き、馬子を變れば手荒さことをするであらうから、

さることを知る事が出来る、廣い意義から云へば、經文  
 釋疏は皆文藝である、之を味へば無限の力を得るので  
 ある、唯だ形の事のみには奔るものは眞實の同情を表す  
 事が出來ぬ、故に人に同情を爲すことに適切なる教訓  
 ある書籍は多く讀まねばならぬ、世人は心理學と云ふ  
 學問は六ヶ敷と云ふが、それは六ヶ敷でもありませんよ  
 うが想像と経験に依て能く解る、先年青森縣に大飢饉  
 があつたとき、岩崎家の令息が高等師範學校の附屬に  
 在學して居つて、飯が食べられぬと云ふが糧から盛つ  
 て食べたら宜いと云つたそうですが、則ち其は飢饉と  
 云ふ苦痛の想像も経験もないからであります、それで  
 すから高貴の方も一般の人も通じて種々の経験を必要  
 とする次第である、例へば家庭に在りては姑と嫁との  
 關係が一番圓滿に治まらぬ、何處の高等女學校でも出  
 來るだけ長者を大事にせよと云ふて教へますが、さて  
 退いて考へて見れば、少しも其方法が分らぬから佛性  
 を發現することが出來ぬ、今諸姉は年一年に青春の時  
 を送り去れば、段々面白味が少なくなつて種々の苦み

が殖へて来る、人間の面白のは五管の凡てが満足せらるゝ時である、然るに友達が一人逝き二人死すると云ふ悲報を耳にするに至りては、何となく哀れなものである、吾々は當世に働いて居るがいよゝ働けないと云ふことになる、誠に哀れなものである、誰人でも自分の知りて居る人から親切な言葉をかけられると、誠に云ふ地獄で佛に遭ふた様な心持がする、其様であるから老人などは少し親切な言葉遣であつても何となく喜ぶもので、子供に土産を買つて行けば跳ね廻つて喜ぶが直ぐに忘れて了ふ、老人には少し位のことでも非常に喜ばれる、外出などの時にも杖を持ってやるとか手を引いて案内するとか致しますれば何とも言へんほど喜ぶものである、佛教に説かれます因果の法則は廻る車の如しでありますから、自分の心の欄に慈悲を入れて置いて、之によりて萬事を行へますれば多く誤りはないこと、信じます、私の實際談では恐れ入りますが、私の母はもう先年歿くなりましたが、博覽會の時、母は電車にも人力車にも乗るのは嫌で厭だと申しますか

が、其校の職員を招いて披露の宴を張りました、丁度役所と同じ様に高等官と判任官と云ふ風に區別をして馳走しました、處が職員は満足しない頗る不平であつた、言ふまでもなく教員は小學校でも大學校でも何れも其に尊敬せねばならぬ、此の心持を知らないのは想像も経験もないものと云ふ譯合にある、人は自分の経験したこと、異つて居ると氣持が悪い、それ故に今の若い夫婦がハイカラ式で、母親や祖母などが経験したことのない新婚旅行とか、又は共に相携へて郊外散歩なんどを行るので感觸を害ひ心持を悪くする、それは能く解るやうに話をして納得させてから行らねばならぬとおもふ、斯ふ云ふ小さな事柄が直接又は間接に感情の衝突を來すことになるのでありますから、充分に注意して欲しい。

宗教……法華經は理窟でない、其慈悲の源泉より湧いて來る感情の清きものでなければならぬ、上人の全生涯の活動は其慈悲の現はれである、吾々はこの大人格に近よりて佛性を開發して行かねばならぬ、本日は

ら、私が背負まして見物をさせました、當時大勢の人は私の行爲を笑ひましたが、私は如何に笑はれましても母に満足せよれば宜しいと云ふ考を持ちましたので最も愉快に感じました、母も非常に喜ばれたのであります、また私は母の肩や腰などを揉みまして慰めましたが、この頃私の子供は父上肩を揉みましようなどと云ふて能く揉んで呉れます、私がさきに母に仕へた事は、今私の身に事實となりて表はれて参りました、げに因果は廻る車の如しとは痛切に感ずる次第であります。

今の人が婦人の自覺などと八ヶ間敷云はずとも、既に教育によりて常識を具へて居る方が、清き同情を事實に表はすならば、そこに渾然として相互の融和を見ることであらう、一體學問上で人格を重んずると云ふが、それは人の心持をよくすることである、人の心持をよくすることが則ち大慈悲心である、心持をよくすることは最も大事であるから細心注意せねばならぬ、有名な教育家が命を某學校長に受けて参りました

御話しが纏まつて居りませんが、慈悲の大事など、其現れに就ての考への一節を申し上げた次第であります。

(本筆記は講演の大意にして先生の校園を經るの期間なきたため文意通せざる點は筆記者の責に在り) 三上 記

日蓮上人云く

父母の御恩は今始めて事あらたに申すべきに  
は候はねども、母の御恩の事殊に心肝に染て  
貴く覺え候。

## 藝道の起原に就て

(東京淺草常福寺中國明會  
發會式に於ける講演なり)

僧正 野口 日 主 師

今日は此度當寺に於て組織されましした國明會の發會式でありまして、人の爲め國の爲め大に賀すべきことであります、全體從來の人々が寺院に對する觀念は眞の意義とは非常に相違して、多くは死人を扱ひ葬儀を執行する式場の如く思つて居つた、けれども佛陀は勿論死後の救済にも御心を凝がれたが、決してそればかりではない、現在の人を明かにし、家庭を明かにし、國を明かにすることを教へられたので、此意味に於て眞に佛陀の尊くお坐することを認め、人の心、國家の精神の明かならむことを期して、茲に國明會と名付けられた次第である、で私は此意味に於て所感を一言しようと思ふのであります。

只今管長現下から大切なる御講話があつた次に、私が登壇しては順序を誤つて居るやうであるが、佛法にとを知らずに、深窓の下流い風にも觸れずして育つた娘達が遂に浮氣になつてしまふ、けれども彼等若し劇の淵源を知ることを得たならば、其處には佛道があつて掛からぬ教訓を得、從て弊害をも受けなくなる。

芝居の本は淨瑠璃即ち東京で謂ふ義太夫であつて、斯界の名人攝津大掾も唯藝人たるのみで眞實のことは知らぬが、淨瑠璃といふ語は原と佛敎から出たもので、法華經の中にも「得淨淨身 如淨瑠璃 衆生意見」とあり、又樂師淨瑠璃經といふ御經さへある、而して此淨瑠璃節の濫觴はと言ふと佛道の因果の理を、俗耳にも入り易いやうに飾付けをしたので、最初は淨瑠璃姫のことを十二段とした淨瑠璃物語といふのを語り出したのである、次に出雲大社の巫女阿國といふのが、室町時代の末葉に出て京に上り、五條の橋詰などで神樂と稱して一種の舞踏を始めたのが歌舞伎芝居の起原であつて、此兩者が合して今日の劇に發達したのである故に其根本は善因善果惡因惡果の理を教へたに外ならない、然るに今日では唯役者の顔を見るのみに行くや

も序正流通の三段があるから、今日は此流通の格で六ヶ敷い話は黙にして、發會式の御祝を申し述べること

に致しましょう。

さて佛法は萬事萬物の根本である、佛敎は個人的事、家庭の事、國家の事の根本たるべき大道を教へたるものであるから、之を知らなければ恰も根なき花の忽ちにして凋落するが如く、人生は終に無情の嵐に吹き荒らざるゝの悲運を免れない、反之佛道を心得たならば根あり花あり遂に甘き果實を結ぶは必定である、即ち我國古來の學術にしても政治にしても將たまた商業にしても、皆佛敎に根ざして發達したことは歴史に徴しても明かなる事實であります。

今他の事は暫く措いて、佛道と藝道との關係に就て一例を挙げますれば、近來東京には殊に演劇が流行して居て、佛敎の會合には木戸も下足も無料で且つ茶を出して、而して身の爲めになる話をしても容易に人は集らないにも拘らず、高い金を拂つても觀劇には欣んで出かける、然るに其劇も其淵源は皆佛敎であつたこ

うになつた爲め、其弊のみあつて更に益する所が無くなつたのであります。

尙淨瑠璃の源に溯つて考へると謠である、謠は佛敎の梵唄から出て居る、そして謠は僧侶が謠ひ創めたもので佛敎とは重々の因縁がある、其が漸々に變じて清元、常盤津、一中節、端唄となり、又人は追々高尚なるものを遠かり終に親の前では唄へぬ程の俗謠と成り下つた、今人心が明かに成れば何事にも深い意味を見出し得るもので、凡そ人には何か娛樂がなければならぬと同時に、其娛樂は高尚でなければならぬ、高尚なる娛樂の中には必ず善き教訓の含まれて居るもので、世の萬事亦皆然りである、人心も此教訓を見出し得るまでに明かになつて欲しいと思ひます。予は今日何故に如此話をするかといへば、演劇等には人が集まるが大切な尊い會合には來ない、爲めに世人は墮落して苦を生みつゝある現代の状態であるから、人心を明かにして娛樂の中にも教訓を味はせたいと思ふからであります、是れ即ち先刻管長現下のお話の向上の一方



の如し  
 一、定款の制定及其發表  
 一、總意書の發表  
 一、役員の任命  
 是にて設立總會は拍手の裡に終りを告げたり  
 六月十二日委員會を開き附托事項を議す嵯崎  
 博士の執筆せられたる總意書左の如し

日蓮聖人靈蹟保存會の總意

我日本國は八萬の國にも超えたる國でかし  
 と噴出したる日蓮聖人は日本國の柱を以て  
 自任し、法國冥合の理想のもとに法華一乘  
 の妙法を宣布し給ひたり、爾來六百有餘年  
 教化の威徳は赫として人心に光被し、加へ  
 るに近年意識の覺醒と求法の熱誠とは世人  
 をして益其の高風を景慕せしむるに至れり  
 惟ふに聖人が心血を凝らし眞筆及び聖人  
 に因縁深き寶物に接して其の智徳を追慕し  
 又行化の芳瑞を留められし靈場を依りて其  
 の宏化に感憤するは、聖人の高風に同化し  
 て靈應を仰ぐの捷徑なりと信す、然るに聖  
 人の門下派を分ち境を劃してより統一を缺  
 き、保護の方法區々に失し、從て聖人の遺  
 書自ら散逸し最近に於て最も敬重すべき遺  
 文烏有に歸し、遺跡又荆棘の中に滅せんと  
 するものなきにあらず、洵に痛歎に堪へざ  
 るなり

此時に當り聖人の眞筆及寶物を保護し、溼  
 晦の靈場を顯彰するは是れ豈に世界に誇る  
 に足るの偉人を生みたる國民の光榮にあら  
 ずや  
 是れ我等が茲に靈蹟保存會を組織して聖人

の眞筆寶物及び靈場を永遠に保護すると共  
 に其の深遠なる愛國的精神を發揮し、以て  
 國家に裨益する所あらんとする所以なり  
 願くば誠意を以て一貫し明治の盛世に此淨  
 業を成滿せん敢て江湖の賛同を切望す  
 明治四十四年六月  
 また委員一同の制定したる規約は二十條と  
 り成る

日蓮聖人靈蹟保存會規約

- 第一條 本會ハ日蓮聖人靈蹟保存會ト稱ス
- 第二條 本會ハ日蓮聖人ノ遺書遺物及遺跡ヲ保存シ永遠ニ傳フルヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ノ事務所ハ東京市内ニ設ケ
- 第四條 本會ノ資金ハ會員其他ノ寄附金並ニ臨時收入ヨリ成立ス
- 第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 理事七名、監事三名、評議員若干名
- 第六條 理事ハ法令及ビ本規約ニ基キ會務ヲ處理ス、監事ハ法令及ビ本規約ニ基キ會務ヲ監査ス
- 第七條 評議員ハ左ノ事項ヲ審議ス
- 一、重要ナル會務
- 二、豫算及ビ決算
- 三、理事ノ諮問事項 但シ議事ハ出席者過半數ヲ以テ決ス
- 第八條 理事及ビ監事ハ評議員會ニ於テ選任ス
- 但シ其任期ハ各三ヶ年トシ滿期再選ス
- 但シトテ得補缺當選者ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス
- 第九條 評議員ハ名譽會員並ニ特別會員ニ於テ互選ス

但シ其任期ハ滿二ヶ年トシ補缺當選者ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

- 第十條 本會ノ會員ヲ左ノ如ク區別ス
- 一、名譽會員
- 二、特別會員
- 三、通常會員
- 第十一條 通常會員ハ特別會員トシテ名譽會員並ニ附金額及住所氏名ヲ理事ヘ申出グベシ
- 第十二條 名譽會員ハ碩學高僧其他ノ名士中ヨリ理事會ニ於テ推選ス
- 特別會員ハ本會ノ事業ニ就キテ特ニ貢獻スル會員中ヨリ理事會ニ於テ推選ス通常會員ハ金麥拾圓以上ヲ即時若クハ十ヶ年以内ニ分賦出捐スルモノトス
- 第十三條 本會ハ特ニ委員ヲ選任シテ靈蹟調査等ノ事項ヲ囑托スルコトアル可シ
- 第十四條 本會ハ隨時講演會ヲ開キ又ハ靈蹟ニ關スル圖書ヲ出版シ寶費ヲ以テ會員ニ頒布ス
- 第十五條 本會ハ會員並ニ本會事業ノ贊助者ノ芳名録ヲ製シテ永遠ニ保存ス
- 第十六條 本會ハ本會ト連絡アル靈蹟ニ於テ會員ガ特ニ優待セラル、等ヲ計ル可シ
- 第十七條 會員ハ死亡若クハ任意退會又ハ除名處分ニ因リ其實績ヲ表フ
- 第十八條 會員ニシテ本會ノ規約ヲ遵守セズ又ハ本會ノ體面ヲ毀損スルモノハ評議員會ハ決議ヲ經テ之ヲ除名ス
- 第十九條 本會ハ毎年三ヶ月前年度會務及ビ收支決算報告ヲナス
- 但シ其方法ハ理事會ニ於テ之ヲ決定ス
- 第二十條 本會ハ適當ノ時期ニ於テ財團法

人ノ組織ニ改ムルモノトス  
 尙ほ同會は規約第二條に擧げたる目的を達せんがため先づ計畫する所左の如し

- 一、聖人開教の靈地たる安房國清澄山に一大紀念碑を建てること（眞言宗清澄寺の同意を得たり）
- 二、漸を追って諸州の靈場を調査し、其の荒れたるは之を修し、その隠れたるは之を彰はすこと
- 三、御遺書御遺物の所在を精査し、正確なる目錄を作り世間に發表すること
- 四、右の品々を寫眞版に作り一には之を世間に紹介し、一には永世保存の途を圖ること
- 五、御遺書御遺物の保存方法、完全ならざるものには保護を興へて其の完全を圖ること
- 六、靈蹟に關して世間の注意を促し、また種々、將來の誤謬を匡すために、講演會を開き或は書物を出版すること

以上は其の概略に過ぎざれども特に急務と見るべきものより順を追ひて完成を告ぐる方針なりと云ふ吾等は斯かる大偉人の靈蹟を保存するは即ち我が國の光榮を保存する所以にして又實に國民の風氣を革正し國運の發展に資するの道なりと信する也されば餘りあらば費けんと云ふが如き氣の乘らぬ態々たる時にあらざらずして是れ門下教團の私すべきものにあらずして現代國民は大に進んでこの大聖業を賛け將來の日本國民に不斷の教訓を遺さんため其完成に努力一番すべきを當然の務なり

と謂ふべし敢て宗の内外を論ぜず大偉人の我日本國に生誕し給へるを受として慶を共にし其人格の偉化を感受せんとするは誰ひ來りて此大聖業を賛げんとを切望に堪へざる也

○東京天晴會

◎六月の例會は十日午後四時より九段阪上富士見軒に開かれた此日文藝界の明星幸田博士に文藝と宗教と國家と云へる議題について卓越の意見を發表せられたるので會するもの例月を比して甚だ多かつた開田幹事によりて開會を宜せらるゝと同時に幸田博士は壇上に表はれ開口一番現代文藝は餘りに意義淺くして影響を及ぼすの範圍甚だ狭く何等他面の意味を包含せざる單調のものなるが故に成績の見べきものなしとて文藝上の作品を評し去つて文藝の本質に論及し更に國家發展の要件を説き國家は文藝及宗教を容るゝだけの寛容がなければ其存在が六ヶ敷い文藝は亦國家と宗教との目的精神を味ふたものでなければならぬ宗教は固より國家と文藝とを包含し其光輝を放つべきである然れども現代に於て文藝の旗を押立てて文藝に志すものがない文藝は宗教と併格せんとする傾向を存するが宗教も個人を本位として國家の消長を無視するものあるが如きは振はないのに勿論であるが害毒の甚しきものである現代及將來に於て國家と文藝とが没交渉で終るべきものでないと同じ時に宗教は更らに一段進んで國家及文藝を包含してなほ裨々として餘裕の在るものでなければならぬ三者は必ず協同的調和的の活動を

爲すべきである而して斯の如くに到らば國家も文藝も宗教も發達すること明かである日蓮上人は立正安國主義のもとに活動したので別ら其宗教は現代及將來に於て國家と文藝と協同的に調和し發展し行くものであると思ふので大議論の所は流石に當代一流の文藝家にして而もその并事の巧妙なる眞に敬服せざるを得ない博士は文藝院の委員に在るので將來の文藝作品に就て大に國家と宗教とを協同的に併進せしめ其主義を實現せしむるに努力せらるゝことと思ふ午後七時食堂は開かれたので晚餐の車に就いて會員何れも相對して其所感希望を語りつゝキョウの音は中々に賑々である宴中にして松本幹事は新入會者を紹介せられた陸軍少兵大佐菅波允介君海軍大佐堀田三郎君海軍中佐内田虎三郎君陸軍二等主計正笠原幸之助君陶器會社取締役藤原芳明君の五紳士であつた會員は滿腔の敬意を捧げ拍手を以て迎へた同會は例會開會ことに知名の紳士が我日蓮主義の大精神に感服して多年習慣によりて支配せられたる厭世佛教の念佛門を斷て立正安國主義の辨明に志す人が多いは實に法國の爲に欣幸に堪へないことである午後八時半晚餐が終つてから佐藤海軍大佐より自著「帝國國防史論」を來會者一同に贈られた該著はききに長きあたりの天覽に供へられ巻頭故伊藤春樹公の韓國より歸途吾妻艦中にての感觸の玉篇あり東郷伯の自決將命と題せる名句は活躍して居る而して本書は日蓮主義を中心として以て國體を論明せられたるもので

あつて上巻七十五頁には國體的觀念を主とする一の教義は假令ば雲間に顯はるる明月の如き輝輝人目を射偉人日蓮の大獅子吼は立正安國の聲に伴ふて起り云々と正々堂々として七百五十頁の卓越せる大議論である加藤日宗諸主幹の講義の豫報はあつたが時間が無いため延期せられたので高説を拜聴することを得なかつた會員は和氣霧々談笑語のうちに散會したがげに異體同心の祖訓を奉じて誠意研鑽の道程にあるもの、境涯こそ法悦に充てるものと謂ふべき。(白碧生)

○地明會

婦人天晴會の意氣と希望を抱いて生れたる本會は六月十日午後一時より青山の安川邸に第一例會講演を開いた。是きに本會發會式の時小笠原子爵夫人の祝詞のうちに「天晴會と相違ひ心靈界の光明となりて」と云へる大理想があるので、日に日蓮主義を擁護するの誠意を有たないものは會員としての資格を缺いて居る又會員としての條件はないが婦人としての中等教育を卒へたものが又は紳士の夫人として實際社會に活動して居るものでなければ所謂天晴會と相違ひ婦人社會の指導を爲すことが出来ないが歓迎しない同會は世間普通の婦人會とは其性質も目的も全然其趣を異にし漸次研鑽の歷程を履んで日蓮主義の堂にのぼり絶對の覺悟に到れたときには則ち日蓮主義に於ける邁進の勇氣と持久の耐忍と透明なる判断によりて廣く天下人心の歸向國民生活の要義を識らしむるに努力するだけの抱負理想を懷いて居る元より其實現はいつである

かは知らぬが精神は其處に在るこれは同會の旨趣を誤るもの、ために一言して置かざるを得ない午後一時半大本會の賓席に於て國運隆昌の大祈念を修し會員一同合掌恭敬の至誠を捧げて妙名を信願し身心を清め玉音の汚れを拂ひたる後本大僧正は特に同會のために編纂せられたる種香集の發心篇を講ぜられたが、いづもながら義理整然たるもので學理的に又通俗的に詳々切々として噴んで含める體である發心とは世間では種々の意義に使はれて居るが茲に云ふのは宗教心のことであつて人の心の中の善き香を發し美しき花の咲くのを云ふのであるが其花を咲かせるには發心の種類を説明するの要ありとて感應實在神祕靈驗道義推理の六種を列ねて縦横に説かれたが感應に就ての譬喩の一例を擧ぐれば天邊の月清見海の水誰も其存在を疑ふものがあるまい此の自然の大觀風光に接して何となく無限の感興を起さざる者は尠ない而して此感と天邊の月の光りととの應とは正に道交の意義であるといふ論調の方式によりて高島一時間半に亘りて六種の發心を説かれた高島先生は本誠に掲載してある慈悲に就いて最も熱心にして通俗平易なる講話をせられた特に婦人日常生活のことに注意を與へたので一言一句會員の肺腑を衝き人の心持を能くせればならぬ親は大切にすべきであるといふ一段に至つて先生の實行せられた老母を背負ふ博覽會見物に行つた事實を話したときはみな嘘は涙に濡ふて居つたが共に其身のときは省察して深く痛切に感じたことであらう講演が終ると茶すしの聲

○法國會

六月廿日午後六時より日本橋阪本公園の臨亭に例會講演を開いた天晴會幹事關田彌部は日蓮上人の人格と題して豊富なる資料と快活

○妙教婦人會

六月十六日例會講演を淺草南松山町法成寺に開かれた本大僧正は地方へ這教せられたが野口彌正は導師として嚴格なる新念同向を修し午後二時より山根權彌正は永遠の生命と題して現在人生の問題のみに奔走しつて精神上の永遠の生命を得ることが出来ないものは個性の發展を遂げたいものと云へない此の宗教によりて永遠の生命を求むべしとて覺悟を與へ野口彌正は妙莊嚴王品の大意に就て因縁譬喩を引き來り淨穢淨眼の兄弟が佛の教を聞いて侍從禮拜の修行を積み母の淨德夫人亦能く其教を信奉して居つたが父は波羅門に執して敢て佛に近よらなかつたが二人の兄弟は我等は法王の子ならん此の邪見の家に在りたりとて深く嘆かれた而して兄弟は父の邪念を翻さしめんとして神變を現じたので父は驚き歎んで遂に發心をした兄弟は出家して藥王藥上の菩薩となるを得たが之れ則ち淨德夫人の二子を激勵したからであるとして婦人の力の大なると自重すべきを訴へて午後四時別會を告げた

○國明會

六月十八日午後一時より第四例會を淺草吉野町本部に開く淺草區内の要所に十數枚の廣告紙を貼付し日蓮主義の大法を説いて意義ある紙を送らしめりてやと準備に努めたるため未見未信の聽衆ありて午後一時半三上若は上人の人格の情的方面を論述して現代思想の缺陷を痛撃し上人の人格を學ぶにあらざれば思想の充實は期し難しとて論議を結び井村彌本大學教授は人の心得に就て精神生活の大事なる所以を説き教に依り道に従ふて茲に始めて人らしき生涯を送るを得べきものにして特に一切を認めたる日蓮主義は教の最高なるものなり故信奉すべしとて一時間餘の講説を終り直ちに書院にて統一節の主唱者宇都宮主計之介氏の日蓮上人發會辻説法的一段を語つたが氏が二十餘年の發道修養は長足の進歩であつて其調の一聲は高く一聲は低く勇壯快活なるかとおもへば悲壯沈痛を極むる所蓋し藝術の妙技ここに存するものかことに上人と門弟との愛情の濃くにして敬意と進育との温かき接觸のこころ眞に聽者をして秋を較らしむる所がある聽衆の歸途に就いたのは午後六時過であつた

に開く午後一時半鈴木會長長壽師のもとに大法の妙味を擧げて立正安國の祈念を修し山根權彌正は精神修養の大切な所以を説いて上人一代の芳蹟の實とを懇示し本大僧正は凡ての事業は精神の充實より表はれて成務を期するものであつて精神の充實は人の根柢に存在する宗教心を開發せなければならぬ開發の動機は大體六種はであるが先づ實在せる偉大なる體格靈力を信願感孚して向上性を磨き上ぐるものが大事であるといひ多くの論議と適切な因縁譬喩を擧げられ論議し去り或は來りて聽衆の靈性に響きを與へ感かして多年の妄夢を醒ますものがあつた

○徳教青年會

同會は例月一日と十五日の午後六時より講演を開き専ら實業家の子弟を教養せらるゝのであるが關田師の不撓の指導は所謂五十轉展隨喜功徳と云ふ工合で例會ごとに入會者があつて中々盛んである講演は二席あるので始めに成申書書の聖句を基礎として生活上の道義を教へ終りに宗教の必要なる所以又は信仰の効果等に就いて詳細の説明を與へらるゝので商店の子弟などは其動き振りが異つて來たと云ふが眞に現代教育の缺陷を補ふ適切な教育機關である斯かる通俗教育の施設が多くなればいけぬ此項内容省や文部會が全力を盡して居る問題は即ちこの通俗教育の施設普及であるされば同會の如き倍々健全なる發展を見ることは必然の數である

○第一義會

七月二日例會講演を開いた例によりて終法

○親善會

六月十五日第一例會を淺草吉野町同會本部

を行ひ井村彌部は佛知識と題し最高の教を説くことは善き知識を得るにありとて日蓮上人の大善知識なるを懇示し野口彌正は如教修行抄を拜讀してといへる講題に就て最も平易簡明に上人一代奮闘の活歴史を叙へ若輩共なる弟子檀那はこの英風を敬慕して其遺徳を維持しさらに發揮せざるべからずとて一大覺覺を與へ講堂の聽衆を感憤せしめ茶菓の饗應ありて午後四時半散會を告げたり

○第一部監督布教日誌

五月十日日午前九時三十分京都を出發し遠州見付に向ふ生職山本通辨師及總代彌部權作句坂崎義形遠次太郎諸兵衛を同して中泉停車場に迎へ車を列ねて支妙寺に入る山本師の布教上の施設と將來の希望を聞へて快を覺ゆ

因果論

初めて開祖の權地に詣て野老僧正

國に法に依て昌ふ

山本通辨師 彌部布教師 野老僧正

宗教の真意義

晝夜とも聽衆約百五十人皆耳を傾け熱心に講

聖十六日山本師及總代諸氏の見送を受け中泉

驛を發車十一時鷺津驛にて朝倉一乘師の出現を受け兩車にて妙立寺に入る午後八時演説會閉會

閉會辭

不自憐身命 高橋布教師 銀井布教師



決定し十九日野老、梅室、北川、西村、金光の幹事集會せり

○大阪天晴會

第十二例會 六月十五日午後六時中之島公園内大阪マテシ大廣間に於て開演當日は折柄京阪地方出張中の本多大僧正及び田中居士を招聘して特に一場の講演を請ひ其旨會員並に有志者に披露したりしかば風雨中にも拘はらず會衆二百餘名に及び先づ

日蓮上人に對する研究に就て 梶木 日種氏

次で兩講師の講演に入る 法の尊重すべき所以 田中 智學君

思想界下の問題 本多 日生師

田中居士は一時開演中に降り降り々々講談せらるる本多師は思想界下の問題の中に於て靈肉の調和敬神の眞意義に就て痛切に論議せらるる會衆滿悅の内に午後十時閉會

○神戸高商日蓮崇仰義會

六月十四日午後三時神戸高等商業學校講堂に於て臨時會開演本宗會長本多上人を特請して左の講演を聴く會衆二百餘名 宗教心と日蓮主義 大僧正 本多日生師 師は先づ人類に宗教あることを述べ夫れより感應、實在、神秘、懺悔、道義、推理等諸種の宗教心を説き之れに對して一々日蓮主義を宣明せられる熱誠明快の講演二時間餘何れも傾聴して能はず午後五時閉會

因に本多師は同夜神戸市兵庫大開道場本法師宗布敷所へ出錫あり翌日同所にて法話會ありしといふ

第二例會 六月二十三日午後二時より同校に於て開演左の講演あり 日蓮上人の人格に就て 梶木 日種師

○見付教報

例二回熱意なる講演を催はせる見付教壇に今回更に日蓮主義研究會及顯本法華宗婦人會なるものを組織せらるる研究會は六月十一日午後一時開會したる會員は主として町内有爲の人々にて時宗宗宗等の奥分子をも含む由本師は三世親てお題下に講演せらるること約二時間終つて會員より釋尊の生誕及入滅に關する疑義質問あり是に對する師の懇切丁寧なる解明は能く以て遠州一帶における迷妄の邪念に因はれし一輩には劃期なる覺醒となり邪乎たる宗教信念の開發となり漸次其靈力を興へなば活ける人格を作り得べく一同和氣運々の間に開演したるは午後五時なり

婦人會は十八日午後八時開會 婦人會設立の趣旨 山本 通辨師 婦人會設立の趣旨 山本 通辨師

婦人の心得 吉田 聖時師 山本 通辨師

講演に移るや無情にも天沛然として雨を降す如何に今宵發會式なればとて此の雨にては如何にやと思ひきや熱烈溢るるの徒に余提燈もて雨を後し來るもありて五十餘名の多數を算しぬかくて演終終るや社會教育上に關する幻

燈を備はし吉田師の說明に能く會員一同に興味と感動とな興へ午後十一時無事散會せり

○豐橋教報

六月十五日妙圓寺に於て婦人會例會を開いたるに降つて居つたが會するもの百餘名の多きにのほり國友文學士の慈善に就て婦人の爲すべき事業の方面を懇切に講説してさらに精神の根柢より此の大善根心を修養すべきを教示せられた十九日には本多大僧正を招聘して日蓮主義の講演を催したる會衆は六百餘名日蓮上人學生の主張と題せる講題にて週々三時間に亘り上入生涯の活動の本源は其信仰より活き出で其信仰は統一にして宇宙の眞理生命なるを説き一乘の大法にあらざれば救済の靈力なきを論じ而して救済力の大教義は個人を満足せしめ國家を向上せしめ得る一乘教に存す則ち此大教義のために六十二年の大道客に對し笑ふて奮闘したるものなりとて論を結びたるが氣憤激刺の論辯は聽衆をなして岸壁を存んで傾聴せしむるものがあつたこの一場の講演に於て眞實に多年の課題を一轉化して正義の旗下に拜跪するまでに進むべきが少なからず遠州一國の思想界には覺醒の大光輝である近き將來に於て其大なる響きに驚いて夢は醒むることゝおもふ

○九州教報

日蓮主義研究會は實業家の發起にて五月發會式を舉げ爾來熱心研究の歩を進めつゝあり六月例會には前海師の講演及川上古山等諸氏の研鑽の結果を披露し修養に資する所多大に

ありたりき七月二日久留米市本壽寺に開き日蓮上人の人格研究方法に對する講演ありて盛會なりき

教學財團基金申込報告

第四十回 (三十四年六月)

▲有功會員

京都市三條通室町西入 西村治兵衛

全市三條通室町西入 林 誠一

全市河原町通下丸屋町 野老 乾爲

全市正行院權 西村吉右衛門

全市聖護院町 石田 音吉

一 金壹百圓也 姫路市五軒野妙立寺住職

一 金壹百圓也 岡山市山崎町本行寺住職

一 金壹百圓也 能仁 事一

▲護持會員

一 金五拾圓也 京都市正行院權家秋山覺治郎

一 金五拾圓也 長島宇一郎

一 金五拾圓也 弘田 八助

▲正會員

一 金參拾圓也 京都市正行院權家吉川平兵衛

一 金參拾圓也 吉田 クル

一 金參拾圓也 富岡 榮七

▲通常會員

一 金二拾圓也 京都市正行院權家西山定次郎

一 金貳拾圓也 京都市正行院權家秋山善一衛  
一 拾圓也 全 森田勝次郎  
一 拾圓也 全 中村藤三郎  
一 拾圓也 全 森 喜兵衛  
一 拾圓也 全 瀧川忠三郎  
一 拾圓也 全 村上源三郎  
一 拾圓也 全 橋本藤治郎  
一 拾圓也 全 中島定次郎  
一 拾圓也 全 高田定次郎  
一 拾圓也 全 川原林牛四郎  
一 拾圓也 全 小林勇治郎  
一 拾圓也 全 木村留次郎

▲贊助會員

▲京都市正行院權家 原田 太七

▲同市寂光寺權家 長瀬富三郎

▲同市寂光寺權家 山田 あさ

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 山田 あさ

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

金七圓 (三) 千葉縣實相寺外五ヶ寺兼任全人  
金壹圓 (完) 福井市善慶寺住職 加藤 覺治  
金廿圓 (五) 京都市本念寺住職 大須賀多選  
全 (四) 全 寺住職 矢野太郎吉  
金拾圓 (四) 愛知縣妙泉寺住職 猪野 貞立  
金貳圓八拾錢 (完) 全 寺 權家 中  
金五圓四拾錢 (完) 千葉縣妙泉寺住職 大津賢洋  
金四圓 (完) 全 寺權家中 岡本若吉外十九名  
金拾四圓 (完) 全 寺長長庵寺住職 加藤 光英  
金五圓 (三) 姫路市妙立寺權家 多田 耕  
金四拾圓 (四) 京都市本光寺住職 今成 乾雄  
金拾圓 (一) 全 寺權家 小瀬源次郎  
金五圓 (一) 全 全 權家 中 松原政太郎  
金參圓五拾錢 (七) 岩國長久寺 權家 中  
金五圓 (五) 神奈川縣本業寺 權家 中  
金貳拾圓 (一) 京都市聖護院町 井上 清吉  
金四拾圓 (完) 京都市妙立寺權家 井上 清吉  
金六拾八圓拾參錢 (第二回) 全 ばな  
金四拾圓 (完) 廣島縣妙立寺權家 山中 福藏  
金拾五圓 (三) 全 高東 康一  
金拾圓 (一) 全 富野慎太郎  
金拾圓 (完) 京都市法華寺權家 鈴木 須左  
金拾圓五拾錢 (完) 全 實教院代 田上 寛靜  
金參圓 (完) 全 妙泉寺權家 全 人  
金參圓 (完) 全 上 行 寺 權 家 北川 清助  
金拾圓 (一) 全 上 行 寺 權 家 山田 榮六  
金貳拾圓 (一) 全 上 行 寺 權 家 樋口 孝道

教學財團基金受領報告

第三十九回 (三十四年五月)

通計九萬參百參拾貳圓五拾參錢也

小計貳千五百參拾壹圓也

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助

▲同市寂光寺權家 川村 多助



金六圓(三) 京都市大慈院住職 銀井 乾升  
 金貳拾圓(元)全 乙葉俊次郎  
 金貳拾圓(元)全 大塚善五郎  
 金參拾圓(元)全 久造寺住職 坪永 日監  
 金六圓(元)全 同 榎家 井上 平吉  
 金參圓(元)全 同 堀江 幸吉  
 金貳圓(元)全 同 栗尾與右衛門

◎静岡縣北松野妙松寺檀  
 金五圓 住職土屋賢生 壹圓宛 田中秀麿  
 同貞吉 望月宗告 天野傳作 五十錢宛 藤  
 住田中日郎 白井多作 同繁太郎 同百太郎  
 同 竹次郎 宇佐美善吉 同幸作 同房松  
 佐野戶三郎 參拾錢宛 田中龜太郎 同金作  
 佐野萬吉 天野貞次 吉田鐵右衛門 宇佐美  
 長吉 貳拾五錢宛 深澤由太郎 同流十吉田  
 豐太郎 八圓廿二錢五厘 佐野平重外七十八  
 人(第八回)

◎鳥取縣松崎本立寺寺檀

金貳拾圓宛 市橋馬藏 市橋彦藏 金拾六圓  
 市橋梅吉 參圓宛 市橋千藏 立木ツヅ武圓  
 宛 杉村五百藏 住職窪田純榮(以上第三回)

◎福井縣今庄善勝寺檀家

金貳拾圓 京藤長右衛門 金拾圓 京藤其五  
 郎 金參圓宛 京藤由太郎 同源次郎 金貳  
 圓 京藤小八郎 壹圓五拾錢 川崎喜作 壹  
 圓 加藤由松(第三回)

◎岡山縣和氣本成寺寺檀

金貳拾圓 本成寺 拾圓 藤本吉松 五圓宛  
 宇高榮次郎 岡藤俊徳 四圓 長谷川司真

三郎壹圓廿錢宛 村瀬周次郎 水野常吉  
 壹圓宛 久米次郎右衛門 同明三郎 中村真  
 吉 松本八重吉 榎原五左衛門 布日政信  
 八拾錢 水野次郎右衛門 六拾錢宛 水野植  
 之助 村瀬彌太郎 古内いち 松本拾吉 加  
 藤周平 五拾錢 久野長之助 四拾錢宛 村  
 瀬惣之助 水野市太郎 加藤藤太郎 貳圓四  
 拾錢宛 岡田吉太郎外拾名分(以上第五回宛  
 納)貳圓 久野由太郎(第四回)

◎盛岡市北山法華寺檀家  
 金四圓宛 石川嘉七 關萬次郎 湯淺儀次郎  
 參圓宛 桑原徳次郎 金田信一 貳圓宛  
 細越平吉 佐々木岩太郎 同治助(以上完納)  
 細越和吉 石川伊三郎(以上第四回)  
 壹圓宛 川村多助(元) 工藤善太郎(三) 六  
 拾錢宛 池田クニ 中市隆造 四拾錢宛 岡  
 宮モト 同熊次郎 鳥川ナミ 安宅仁太郎  
 (以上完納) 長岡徳太郎(三)

◎京都市正行院檀家

金壹百圓 西村吉右衛門(一) 五拾圓宛 秋  
 山覺次郎 長島卯一郎 弘田八助 參拾圓宛  
 吉川平兵衛 富岡榮七 貳拾圓宛 秋山嘉  
 兵衛 西山定次郎 吉田ツル 拾五圓宛 森  
 口壽次郎 森舉次郎 拾圓宛 高田定次郎  
 橋本藤次郎 小林勇次郎 木村留次郎 中島  
 定次郎 瀧川忠三郎 村上善三郎 中村藤次  
 郎 河原林半四郎 五圓宛 原田太七 長瀬  
 繁次郎 桑井九藏 上原京(以上完納)

◎同市法光院檀家

金壹百圓 瀧野喜八郎 貳拾五圓宛 木崎音

治 參圓宛 宇高關太郎 宇高慎吉 貳圓宛  
 拾錢宛 須波榮松 從野傳太郎 貳圓宛 藤  
 原勇三郎 瀧口寅太 中島虎三郎 壹圓六拾  
 錢 岡本久次郎 壹圓四拾錢 川口品造 壹  
 圓卅錢 岡本善四郎 壹圓廿錢宛 平松義三  
 太 從野文吉 安東常太郎 壹圓拾錢 從野  
 廣太郎 壹圓宛 從野秋次郎 宇高佐之吉  
 岡本谷五郎 八拾錢宛 平松松太郎 常次  
 郎 岡部源造 六拾錢宛 從野五松 常次  
 利之吉 安藤福太郎 五拾錢宛 平松巖太  
 郎 原佐太郎 平松香三郎 常次萬造 同利吉  
 内山治吉 常次多大郎 義光俊二 宇高虎  
 七 岡部房治 高瀬慎三郎 岡本新三郎  
 尾崎依八 藤原之造 岡崎金五郎 四拾錢宛  
 山本彌平 岡部美喜太 宇田實茂太郎 從野  
 百三 岡本平三 須波廣吉 浦上より 參拾  
 錢宛 岡崎房三 從野平吉 杉本潤太郎 貳  
 圓九拾九錢 杉本仙吉外十六名(第四回)

◎同縣豐橋妙圓寺寺檀  
 金拾五圓 住職白井日隆 拾圓 服部彌八  
 五圓 服部平之助 參圓 鏡子洋平 貳圓半  
 宛 服部泰吉 同源助 曾田良吉 貳圓宛  
 木村爲吉 伊澤龜吉 神田徳四郎 黒川森次  
 郎 壹圓半 倉橋源平 壹圓宛 田中松吉  
 同幾太郎 同仙作 菅沼彦右衛門 同和市  
 田村彌平 同仙作 月田大助 山本立藏 鈴  
 木繁次郎 長尾清江 神谷由乎 水谷黏助  
 内藤より 安達彌作 鳥居治一 加治保衛  
 井川平吉 櫻井祥藏 上島萬次郎 大小島嘉  
 三郎 六拾錢宛 安達平吉 橋本又吉 瀧澤  
 久五郎 鈴木豊七 加藤徳次郎 長尾源三

吉 倉富治三郎 貳拾圓 近津すて 拾圓  
 米田善次郎 四圓 故野村妙経 貳圓 木村  
 十小 五拾錢 杉山吉尚(以上完納)

◎同市成就院寺檀  
 金五圓 住職川崎英雄(三) 貳拾圓星野保子  
 (二) 拾貳圓 富永東一郎(元) 拾圓 小野  
 きみ(元) 八圓 殿村丑之助(三) 五圓 秋  
 篠菊次郎(二) 參圓 山中六六(三) 貳圓宛  
 津崎太兵衛(四) 荒木宗次郎(二)

◎同市寂光寺寺檀

金五拾圓宛 住職田上寛靜 新井みき 龜井  
 牛七 貳拾參圓 蜂原明晴 四拾圓 池田治  
 兵衛 七圓 高橋あけ 五圓宛 田上角太郎  
 山田あさ 長谷川文吉 戸田榮助(以上完納)

波多野義次 田名瀬つよ 正内じゆん 杉江  
 ゆき 飯田健之助 山口勲兵衛 酒井善五郎  
 倉橋太七 小島義吉 同善太郎 櫻木すよ  
 五拾錢宛 山本熊五郎 廣田淺吉 倉木榮作  
 村田經三郎 稻吉清右衛門 熊本長太郎 曾  
 田勇助 佐原三吉 内藤常次郎 四拾錢宛  
 山本友吉 同定八 同惣兵衛 同駒藏 同長  
 吉 佐原寛作 同音平 同徳衛 同竹次郎  
 同清次郎 横田龜次郎 同彌市 伊藤彌七  
 同兼吉 鈴木富藏 同助右衛門 伊藤重吉  
 同岩藏 豊山要藏 同五平 小島安四郎 市  
 川とし 市田道太郎 越知喜三郎 横田常次  
 郎 黒川真太郎 齋藤彌吉 小竹徳右衛門  
 參拾錢宛 竹本仙太郎 同忠作 同源三郎  
 同周作 藤本彌五七 同源三郎 伊藤喜代松  
 同仙作 加藤六三郎 同榮治 古本重吉 同  
 幸七 藤平久松 同榮次郎 山本丈吉 同黏  
 藏 佐原善平 同てい 豊田兵作 鈴木覺藏  
 小竹虎吉 酒井善次郎 内藤福次郎 廣中は  
 る 小野田朝吉 村上芳藏 井本長次 朝倉  
 長次郎 岡松治 平山常吉 足立萬次郎  
 大石徳兵衛 櫻村銀藏 名野平幸作 野末喜  
 十 廿九圓九錢 太田市藏外百四十六名(第  
 五回完納)

◎愛知縣緒川越境寺寺檀

金參圓 住職長谷川日清 參圓廿錢 瀧田繁  
 次郎 村瀬三良平 參圓 龜井けい 貳圓六  
 拾錢宛 戸田由兵衛 水野茂十 村瀬文次郎  
 貳圓宛 水野梅五郎 同和兵衛 同富士太  
 郎 新美永三郎 久米鏡太郎 松本牛次郎  
 淺田松太郎 加藤利八 壹圓四拾錢 水野善

社告

本誌購讀の教友諸賢何卒延滞の誌  
 料を御拂込み下さいまた永らく御  
 滞りの諸賢は特に賢明なる洞察を  
 希ふ。

統一團會計部



# 校本化別頭佛祖統紀 下卷

原本三十八卷合刊上下八百餘頁和裝二卷貳圓四拾錢洋裝貳圓五拾錢郵稅拾貳錢

宗門唯一の史乘として富瞻なる史料を含蓄し夙に佛教史家必須の浩著として定稱あり本書の攷異に資するに正善庵長師の難得意條々記を以てす卷末の**通別一覽志**は**新様式**の年表に改訂し兼て本傳の索引たらしむ上下六百年間宗門の推移消長と之が背景たる鎌倉開幕以後の風色とを窺ふべし蓋是れ封建以後**日本佛教史**の古典

訂校 峨眉集 上卷

近代宗教界の權威たる優陀那老和尚山綱要綴眉を以て三大寶策となす本書の評價復説を須らざるなり

補錄 内扶老 上卷

啓蒙に次で祖書注释の尤なる錄内扶老の繙刻にして標科等の新施設閱讀の便利を加ふ  
▲既刊書豫備殘本有▲

科 祖書綱要刪略正義 本會

訂校 日蓮上人傳記集

訂校 録 内 啓 蒙 第一卷 論卷

訂校 校本化別頭佛祖統紀 上卷

東京市橋區町疊 日蓮宗全書出版會 須原屋書店 振替口座四九〇六番 電話橋五一七五番

信

通

一

統

子 江電と合併に反對理由 來すべきが其見よ  
貴族院議員 代議士立候補の牧内元太郎 貴族院議員 代議士立候補の牧内元太郎  
横濱市過去の大魂膽 大富豪渡邊三郎將來の運命 大富豪渡邊三郎將來の運命  
外人商業不徳論 武田宣明論 武田宣明論  
夫唱婦和迷妄打 與謝野晶子 與謝野晶子  
疑問兒中村房次郎解剖 合戦と足張屋の解剖 合戦と足張屋の解剖  
趣味と實益の統一 常盤主人論 渡邊玉子君は大富豪福郎君 渡邊玉子君は大富豪福郎君  
武士道と儒教と日蓮主義 伯林通信 英蘭的精神的保存 伯林通信 英蘭的精神的保存  
箱根不一と世界統一 皮肉雜報 出陣の妾と無愛過の女將 皮肉雜報 出陣の妾と無愛過の女將  
文天祥正氣歌論 箱根の別天地と三河屋カナル 箱根の別天地と三河屋カナル 加藤明堂 加藤明堂  
市政改正と市參の運命 論社 論社

前祖山學院教師 小山圓泰師著

# 遺文錄解題

八月上旬出來

△內容 御遺文三百八十六章を一章毎に凡て左の十五項に分ちて詳説せるものなれば一度この書を精けば御遺文一篇を其の十五個條の要用條項の下に一讀明了に知られ得るなり

御遺文研究者にとりて最も不便を感せしめたるは時代的説明書の缺乏これなり、今此書世上に流布せば是等の不足の聲忽ち止まん、此書は御遺文研究者にとりては宛も暗夜の燈の如く唯一の寶典なり

- (一) 御本存無否
- (二) 眞偽評量
- (三) 編年當否
- (四) 御制作處
- (五) 宛名有無
- (六) 一抄大綱
- (七) 法門種屬
- (八) 御鈔意趣
- (九) 異本有無
- (十) 末注披露
- (十一) 消釋顯號
- (十二) 御選編號
- (十三) 入文解釋
- (十四) 大小科判
- (十五) 異本校合

△豫約 本誌讀者に限り前金を要せず端書にて申込せるべし

△定價 壹圓の處八月上旬迄の申込者に限り八十錢に割引す別に送料八錢申受く

△表裝 菊判三百頁

是れ著者が十五年間の苦心考案に成れる大著述也

發行所

山梨縣 身延山内

發賣元

山梨縣 中巨摩郡 小井川村

祖山學院  
天鼓雜誌社

振替貯金口座東京壹貳八貳五

大僧 正本 多日生現下講述

## 法華經講演集

序 如來壽量品

洋裝美本  
正價金五拾錢  
郵程金四錢

抑も宗教學上の根本問題は何であるか、即ち宇宙觀と人身觀と超人觀の三種である、故に、宇宙の成立と其實相、吾人の本體と其向上、超人の本體と其力用とに關する、圓滿なる解釋と完全なる知識を得ることが出來ないならば、即ち人生及び自己生存の意義が解らぬので、夢中の生涯と謂はねばならぬ、されば斯の重要問題に就ては、多くの宗教學者が探究研討して居るのであるが、未だ何れも適當なる結論を見出さない、若夫完全にして適切なる解釋を示せるものがあるならば、直ちに進で研鑽すべきことである、即ちそれは一切宗教中、大聖佛陀の説き給ひし法華經に於て光顯せられて居る、法華經の實相觀は、即ち宇宙觀にして萬有の本體活動等を論明し、人開會は人身觀にして、吾人の本體と其向上の状態を説明し、佛陀の顯本は超人觀の妙致を顯はせるものであつて、佛陀の本體と妙用とを圓滿に説かれてある、而して法華經中如來壽量品には極めて明確適切なる解釋を示されて居る、本書は大僧正本多日生現下、畢生の熱誠と卓越の識見とを以て御講述になられたのである、故に一たび本書を精かば、明かに古來未解決の大問題を領解するに到り、意義ある人生に處して、光りある活動と向上とを遂ぐるであらう。

八月三十日迄の申込者に限り郵税共金參拾四錢にて頒與す同期を経過せば原價に復す此際申込あれ

東京市淺草區北清島町十四番地

發行所

統團

(振替口座東京一二一九)

\*\*\*\*\*  
 壽量統一大本尊  
 \*\*\*\*\*

紺紙金泥 横四寸四分  
 縦五寸三分  
 一幅金八錢 郵 稅 貳 錢

信仰は宗教の生命なり信仰は純一にして雜亂を許さず而して純一の信仰は絶對統一の本尊に南無して始めて完きを得べき也

慈悲無限なる哉我聖祖統一の大本尊を光顯して全人類の信仰の依止處を示し賜ふ

幸なる哉この妙典に値ふことを得たる善男善女は度で輪圓具足の大本尊を安置し奉りて強盛の信心を勵み現當の大願を成滿せざる可らずさればこのたび小さき佛壇なりとも安置し得らるゝやう前記の寸法にて紺紙金泥の莊嚴を爲し信法者に頌與すべし願はくは大本尊の寶前に拜跪禮拜して純一の妙行を修せられんことを

東京市淺草區北清島町一四番地

頌與所 統一團

(振替口座東京二二一九)

大僧正本多日生現下著

橘香集

特別皮金文字入美本  
 金六拾錢  
 金貳拾錢(郵稅四錢)

本書は婦人のため起れる日蓮主義鐵仰地明會のため特に本多大僧正が法華經の要文と尊ととき聖訓とを輯めたるものなれば弟子檀那は必ず先づ之を拜讀し修養せざる可らずしかも本書はポケット式にて頗る携帯に便なれば敢て之を薦むる所以也

日蓮主義者は必ず本書を拜讀せよ常に聖訓に接して絶待の大主義を味識せよ

文書傳道は文明的なり時代の也文書傳道は効果多大也日蓮主義者はこの方法によりて布教を爲さる可らず

東京市淺草區北清島町一四番地

發行所 統一團

(振替口座東京二二一九)

宮殿●須彌段  
 前机●幢幡  
 大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度は是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候



正價 三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれす此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價附發賣目錄を製作致置候に付御入用の諸君は、要券四錢御送附被下候は、迅速呈仕候。此の目錄を御覽あれは、寺院佛具の御入用品一切の買物程遠方でも坐な左の通り買物安價にでき升。早く取らせ御覽あれ其の正價附の品は

佛具一具切 通去候の類 ●大般若經 ●一切藏經 ●理趣分 ●位牌 ●太鼓  
 ●佛具金物 ●一切釣鐘 ●半鐘 ●木魚 ●拂子 ●曲鉢 ●香珠 ●珠數 ●大傘 ●扇  
 ●子 ●中 ●密 ●雪洞 ●錦 ●金 ●羅 ●水 ●引 ●打 ●敷 ●和 ●幡 ●人 ●天 ●蓋 ●樂 ●器 ●懸  
 ●鏡 ●鬼 ●幡 ●鐘 ●幡 ●規 ●木 ●像 ●厨 ●子 ●木 ●華 ●經 ●機 ●盤 ●子 ●蓋 ●行 ●鉢 ●盤 ●蓋 ●白 ●鉢 ●水  
 ●三 ●寶 ●指 ●寶 ●並 ●平 ●杓 ●刺 ●匙 ●箸 ●煎 ●茶 ●湯 ●器 ●獻 ●菓 ●子 ●蓋 ●行 ●鉢 ●盤 ●蓋 ●白 ●鉢 ●水  
 ●板 ●佛 ●物 ●蓋 ●高 ●圓 ●契 ●文 ●庫 ●盤 ●具 ●膳 ●香 ●香 ●具 ●類 ●正 ●價 ●附 ●に ●し ●て  
 ●御 ●買 ●物 ●坐 ●な ●ら ●自 ●由 ●自 ●在

佛具卸部 京都市三條 本舖 三法堂藤田總次  
 通小橋西入

小賣部 同市三條 三法堂佛具陳列場  
 通大橋西入

勤行作法

勤請文、助行讀誦(方便品十如是自我爲)正行唱題  
 回向文、受持文、○自我爲讀誦

右は各派統一の理想の下に本多日生師の編纂せられたるものにして、勸請文、回向文の如き最も簡潔にして而も其要義を逸せず總振假名付なれば初心の行者の所用として最も適切なるもの也客月來頌與の求めに應ずるを得ざりしも今回さらに印刷に付し製本出來致し一般信徒の爲めに之を頒たんとす、御入用の方は前記代金を添へて御申込あらば御送可致候也。

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地  
 妙教婦人會

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵五厘 一ヶ月前金六拾  
 五錢郵稅六錢 代金ハ振替貯金口座東京二二一九番へ拂込マレ  
 タシ此場合ニハ諸料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十四年七月十五日印刷發行

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地  
 統一團

日蓮主義研究者の絶好資料

日蓮 天晴會講演録 第貳輯

本書の内容

- ◎日蓮上人の尊容に就て……………竹内久一君
- ◎日蓮上人の勤王に就て……………鷗田堯惇君
- ◎天晴地明……………本多日生君
- ◎富士五山に於ける眞蹟對照の實歴……………稻田海素君
- ◎非律賓の宗教事情及米國の教育主義……………井上長生君
- ◎靈格日蓮の愛國心……………陸軍大佐子爵小笠原長生君
- ◎日蓮上人の筆蹟に就て……………海軍總監僧正野口日主君
- ◎日蓮主義と細民救済……………法學士子爵五島盛光君
- ◎將來の宗教としての日蓮主義の各方面……………「日蓮主義」編輯長 山川智應君
- ◎高山樗牛と日蓮上人……………東京帝大教授文學博士 姉崎正治君
- ◎佐渡前佐渡後……………「妙示」日蓮主義主筆 田中智學君
- ◎宗教的訓練……………東京帝大講師文學士 小林一郎君
- ◎日蓮主義と實生活……………大僧正 本多日生君
- ◎迫害に對する日蓮上人の態度……………東京帝大講師文學士 小林一郎君
- ◎日蓮上人の信仰……………大僧正 本多日生君
- ◎佛界緣起論……………宗務總監僧正 野口日主君
- ◎世界統一は誇大妄想なる乎……………宗務總監僧正 野口日主君
- ◎織田信長と日蓮宗……………東洋大學講師 高島平三郎君
- ◎日蓮主義と日本君臣の大義……………顯本宗大學林教授 辻善之助君
- ◎日蓮上人と源光國公……………顯本宗大學林教授 關田養叔君
- ◎寛政……………「村雲婦人」主筆權僧正 松森靈運君
- ◎西人の法華經觀マスタリオヴアーツ……………海軍大佐子爵小笠原長生君
- ◎日蓮主義と大鹽平八郎……………日宗大學長僧正 柴田一能君
- ◎軍隊教育と日蓮主義……………日宗大學長僧正 鷗田堯惇君
- ◎身延記を拜して……………近衛第一旅團長陸軍少將 林太郎君

發行所

東京市淺草區南松山町二九法成寺中  
東京市淺草區北清島町一四

天晴會事務所

東京市淺草區南松山町二九法成寺中  
東京市淺草區北清島町一四

# 統一

第百九十八號

本佛の大慈を渴仰せよ  
大僧 正本多日生師  
日蓮主義より觀たる婦人の地位  
子爵海軍大佐 小笠原長生君  
忠愛心の養成と日蓮主義  
女子大學講師 高島平三郎君

〔菊版五號活字十四行三十三字詰六百頁張假名附裝釘總クローム金文字入御眞蹟其他寫眞數葉挿入〕  
◎正價金貳圓 五百部限リ特價金壹圓五拾錢  
◎送料内地拾貳錢、清韓卅五錢、臺灣、參拾錢